

2部

フィールド フィールド
現場から現場へ

通信教育部での学習や実習を経て、 今感じていること

OB MESSAGE

通信教育部社会福祉学科卒業生 福田 愛

はじめに

通信教育部で学んだ2年間を振り返る前に、私がこの大学に入学したきっかけについて少し触れたいと思います。私は東北大学大学院を修了して取得した「臨床心理士」の資格を生かし行政で働いています。最初に赴任した職場は、精神保健の第一線機関として毎日市民の方々の様々な相談に応じ、手続きに同行したり自宅を訪問したりと、まさに「生活支援」が中心でした。そうした仕事は、「面接室での心理面接を通して自己実現を図る」という、臨床心理とは異なったものであり、就職当初の私は、自分のふがいなさ・知識のなさを痛いほど感じながら働いていました。今お金がなくて困っている人・症状のため人と交われない人・段取りが組めずに一人で生活できない人たちを、面接室でのカウンセリングによって支援することは困難です。それよりも自宅に伺って一緒に生活を考え、社会保障制度や身近なサービスの情報をお伝えすることの方が、確実に役立つ人たちがとても多かったのです。そしてまた、精神的な病気を抱えながらも地域で自分らしい生活を送る、たくさんの障害者に関わる中で、「その人らしく生活するとはどういうことなのか」「その人たちのために自分にできることは何か」を考えるようになりました。このようにして私は、就職して3年目の春、東北福祉大学通信教育部で、精神保健福祉を学ぶことを決めたのでした。

レポート、スクーリング、試験、そして仕事の日々

今振り返ると、通信教育部で学んだ2年間は、学業と仕事との両立で決して楽とは言えない生活でした。日々のレポート作成や休みの日のスクーリングなど、物理的な時間の取れにくさもありますが、正直生活の中で勉強に向かう気持ちを起こすのがなかなか難しかったです。教科書を読んでも、実際の支援や当事者の置かれた環境との乖離を感じ「これは理想論」「現実はなかなか…」などと感じてしまうこともありました。それでもなんとか卒業までたどり着けたのは、スクーリングでの先生方の話の面白さ・興味深さと、ともに学ぶ学生たちの会話に刺激を受けたからだと思います。特に仲間の存在は、時には励ましに、また時には焦りにもなりながら、自分がどうして精神保健福祉を学ぼうと思ったのか、という原点を思い出させてくれる大事な力だったと思います。そしてだんだんと、先生や教科書が教えてくれる「知識」と、仕事での「実践」とを素直に重ねて見ることができるようになり、自分に足りない視点や精神保健福祉の面白さを改めて感じられるようになっていきました。

実習での学びや気づき

私は、病院や支援センターなど様々な機関で働く精神保健福祉士と接するなかで、精神科病院で行われている治療と社会復帰支援の在り様、そして病院が地域のスタッフや行政に期待する役割について知りたいと感じるようになりました。そこで実習は、日頃からお世話になっている精神科病院で行わせていただきました。その中で私が学んだことは本当に多くあります。地域の資源と患者さんとの橋渡しの大切さ、院内スタッフとの連携の重要性、「本人のニーズ」を中心にエンパワメントするという『本人主体の支援』の在り方、そして長期入院の患者さんが地域移行することの難

しさなど、病院の役割や苦勞が見えてきました。そしてそうした気づきは、私自身のそれまでの支援への気づきにもなりました。「本人主体」と言いながら実は困っている家族・地域住民の声に耳を傾け過ぎていなかったか？本当に本人の困り感に沿っていたのか？ストレングスを見ようとしていたか？など、反省する点が多々ありました。その思いを実習先で話した時に「どういう支援が正解かということはない。ただ、1番弱っている人・声を周りに届かせることができなくなっている人の立場に沿うように、心がけている」と言われたことは、今でも私の心に残り、その後の支援でも核となっています。

学習・実習を経て、仕事へ生かされていること

私は現在も「臨床心理士」という肩書を持って行政で働いています。無事に精神保健福祉士の資格を得た今、その知識や技術は第一線現場の「生活支援」でこそ生かされるものと思います。しかし苦肉にも、その後の職場異動によって現在は第一線を少し離れ、個別の心理面接を主とした仕事に変わりました。ただし、現在の仕事に通信教育部での学習・実習が生かせていないわけでは決してありません。環境を含めたアセスメントやストレングスモデル、本人と環境との接点に働きかける技術は、個別面接でも生かされています。今は、人となりを理解し自己実現を図る臨床心理士としての視点と、精神保健福祉士の視点の両方を持ち、一つの方法にこだわらない柔軟で多面的な支援が行えれば、と意識するようになりました。考えてみれば、悩んでパワーレスになっている人にとって、支援者がどのような学問的立場にあるかは問題ではありません。「私はこれを学んだから、こういうやり方の支援しかできない」ではなく、「対人援助の専門家」としてその人に合ったアプローチや寄り添い方ができる人でありたいと、今強く感じています。

おわりに

ここまで書き進めてきて、私の体験記は特殊なのではないか、皆さんがこれを読んでどのように感じるだろう、と若干不安を感じています。ただ、皆さんそれぞれ置かれている状況は異なっても、不安や葛藤・悩みや焦り・自分へのいらだちなどの感情を、大なり小なり抱えながら学習に取り組んでいるのではないかと思います。苦しい作業だと思いますが、そうした感情を自覚し、もがきながらも前にすすんでいくことができたなら、それは大きな財産になるのではないのでしょうか。今後、より多くの学生の皆さんが、通信教育部での学習や実習で学んだことを糧に、様々な現場でご活躍されることを祈っております。

末筆ではありますが、お世話になった先生方、事務の方々、スクーリングで出会った皆様、そして実習先の皆様には本当に感謝しております。どうもありがとうございました。

スクーリング・アンケートから(1)

スクーリングの際にお書きいただいたアンケートからの抜粋です。

●人的資源論

- ・ 齋藤先生の講義を、もっと若い学生のときに受講できたならば、もっと違った人生があったのではないかと思います。しかし、いろいろ経験し、過去と照らし合わせることができたので、より深く理解できたのかもしれない。自分自身のこれからにとっても役立つ講義でした。
- ・ 就職には不自由せず自己の内面に捕われていた私は、社会全体に対して無頓着であり、そのような視野を持っていなかったことに気づかされました。深い人間関係のためにも社会の現状や経済の仕組み等をバックグラウンドとして理解していることは重要であり、また自分が社会の一員であり、どのように社会に関与していくか、働きかけるかという考えを持ちたいと思いました。先生のお話大変面白かったです。

●地域福祉論

- ・ 社会福祉士の役割として社会福祉での支援活動もあるということに興味深く受講した。地域住民が、地域福祉や福祉コミュニケーションを実践していくことを自分のことと捉え、自立していけることの重要性を感じた。
- ・ 福祉サービスを必要とするという理由によって除外される人がいてはならない。障害者ではなく支援が必要な人、という考え方から人権というものが何かを理解できました。
- ・ 教科書は読んだだけでは理解できないことも、講義は事例も交えながら話されていたので理解できた。福祉＝老人・障害者というイメージが強かったが、今回の授業で「自分の生活に関わること」ということがとても良く理解でき、福祉を身近に感じる事が出来た。

●社会福祉原論

- ・ 施設経験（身体・知的・児童）30年を超えるが理論と現実の違い、ギャップの怖さ、支援者の価値観によって人間性・主体性・人格を含め、いかに利用者の生きる権利を奪ってきたか痛感した。変わらなければならないことを次の世代に伝えなければならない。

※ p. 28・46にも掲載しております。